

子育ての苦労は子育てにあらず！？ ～母親たちが気づいた深イイこと～

“横並び型アクションリサーチ
(私はこう思うけど、あなたは?)”
から見えてきた現代社会

平成 21 年 3 月

特定非営利活動法人 彩の子ネットワーク

はじめに

小さな子どもを育てている母親たちが、自分の中にどんな気持ちがあるか、それを言葉にして「私はこう思うけど、あなたは？」とたずねあい、その言葉をアンケートの質問文にし調査票を作成しました。子どものこと、夫（パートナー）のこと、ママ友、働き方、ひとり親、虐待、障害、本当はどう生きたいか…。調査票を受け取った母親たちが「わたしはこう思う」と記入して、2,312人の母親たちの声となりました。

集計・分析することで、今子育てしている私たちがどう思っている自分たちなのか、どんな社会の中で子育てしているのかをみつけていきました。このアンケート結果をもとに話し合う報告会で、子どもに対してきつくなってしまう気持ち、虐待してしまう自分自身の気持ち、どうしてそうなるのか。目をそらさずに、本当はこう思っていたんだと伝える勇気を持ちたいという大きな気づきがありました。この報告書は、「私は虐待したくない。あなたにもしてほしくない。どうしていくと良いのか一緒に考えよう」という母親から母親へのメッセージでもあります。

この調査の実施自体が、当事者発で「一緒に考えよう」という場を開いていくことであり、母親が他者と安心して自分のことを話せる関係をつくる中で、自分で自分のことを考えていく場になったのだと思います。この調査事業の他に、NPO法人彩の子ネットワークでは、「子育てサロン」という、自分の声を言葉にしていける場、そうできる関係が持てる場を開いています。また、さいたま市子育て支援センター「さいのこ」と、上尾市つどいの広場「あそぼうよ」の2つの子育て支援拠点を運営しています。今年度は、このアンケート調査の実施と並行して、これらの事業の大事なところを集約したかたちで母親が母親の相談を受ける談話相談室を開設しました。

子どもの可能性が開かれていくことを願う母親たちが、自分自身をみつめて他者のこと（子どものことも、社会のことも）を考えられる人となることから、地域での関係をつくり、それが虐待予防になっていく。今回の調査事業で、ネットワーク活動として目指しているものの核心を生み出すことができました。

平成21年3月

I	調査報告	1
1.	今年度の調査について	1
(1)	横並び型アクションリサーチについて	1
(2)	調査期間および調査対象	1
(3)	活動の中心は、乳幼児の母親たち	1
2.	アンケート作成まで	2
3.	調査内容	2
4.	アンケートの配布・回収について	2
(1)	アンケートの回収率	2
5.	分析結果	3
(1)	因子分析について	3
(2)	アンケート回答者の内訳（設問 A）	3
(3)	子どもイメージについて（設問 B）	4
	女性と男性の比較	4
	「待ったなし」がキーワード	4
	因子分析より	4
	分析の話し合いでの意見	4
(4)	妊娠・出産について（設問 C）	5
	因子分析の結果から	5
	女性と男性で比較してみる	5
	女性の世代間での比較をみる	5
	みんなで話したこと	6
(5)	子育て・生き方について（設問 D）	7
	女性と男性で比較してみる	7
	女性の年代比較をみる	7
	第 1 因子「みんなで子育て」に注目	8
	第 4 因子「今どきの子育て」に注目	8
	第 5 因子「一人で背負う子育て」に注目	9
	第 2 因子「育児の悪循環」と第 4 因子「今どきの子育て」と第 7 因子「夫への不満と諦め」の相関	10
	エピソード質問（設問 E）との関係から見えること	10
(6)	ここまでのまとめ	10
(7)	子育て支援について（設問 F）	11
6.	結果発表会	13

資料

アンケート用紙	資料-1
集計表（全件）	資料-9
集計表（女性年代別）	資料-26
集計グラフ	資料-46
因子分析結果	資料-60
因子分析結果によるグラフ	資料-66
設問G）自由記述	資料-86
アンケート作成の議事録より	資料-99
新聞掲載記事	資料-103

I 調査報告

1. 今年度の調査について

国の少子化対策として、出産や育児への経済的援助は年々増していると感じるが、それが実際の子育ての支援となり、少子化の歯止めがかかっているのかという疑問がある。年配世代には「昔に比べたらずっと良くなっている」とよく言われるのだが、本当のところはどうなのだろうか。昔に比べたらはるかに便利な世の中かもしれないが、日々、子育てで苦労したり悩んだりしている自分がある。他の母親たちと話をしても、苦労や悩みはいくらでも出てくる。様々な育児グッズや支援サービスが充実してきたようだが、それが本当に子育ての悩みや不安の解消に繋がっているのか。そして子育てしている私たちが本当に望んでいることとは何だろう。

そのような疑問から、子育てに関わる現状を理解し、どうしていくと良いのかを見出すため、乳幼児を持つ母親たちが中心になり「横並び型アクションリサーチ」で調査を始めた。

(1) 横並び型アクションリサーチについて

横並び型アクションリサーチとは、アンケート方式の社会調査の一つで、調査結果だけでなく、質問を作成すること自体が重要な活動。これまでアンケートの対象者とされていた人たちが、普段の生活の中で思っていることをそのまま言葉にし、「私はこう思うけど、あなたは？」と、横並びの関係で対話していく中から質問を作成。更にその結果をもとに対話を重ねる中で、これからの子育てやそれぞれの生き方を考え支えあっていくためのアンケート&ネットワーク活動。

(2) 調査期間および調査対象

2008年8月よりアンケートを作成する活動を開始。10月～12月にアンケートを対象者に配布し回収。回収後、集計・分析を行い、2009年3月に結果を発表する計画で進めた。

調査対象は、16歳以上の男女3000人程度と見込んだ。今子育て中の世代だけでなく、子育て経験のない若い世代や、子育ては終わったという年配世代にも答えてもらう。様々な世代の回答を得ることで、社会全体の子育てに対する意識を明らかにしたいと考えた。

(3) 活動の中心は、乳幼児の母親たち

アンケートの作成、配布、分析のためのデータ入力、分析、話し合い、すべてを子育ての一番の当事者である母親たちが、“横並び”の関係で一緒に悩み考えながら進めてきた。

子どもたちを傍らで遊ばせながら、また時にはボランティアの方に保育を頼んで話し合いを進めた。自宅では、子どもが寝付いた夜に作業するなど、それぞれの生活の中で進めてきた。

いろんな立場の人の思いを考えたり、普段は言えない自分の気持ちを言葉にすることで、初めて自分の気持ちに気がついたり、だからこそ戸惑ったり・・・。

生活の中でこうした活動の時間が増えるに従って、夫から「母親たちの愚痴大会でしょ、子どもをそんなことに付き合せて」と言われてしまうメンバーもいた。しかし、そのような言葉に、社会の現状が表れていることにも気づいた。

2. アンケート作成まで

アンケートのタイトルを「母親発！今、子育てしている私の気持ち」として、母親たちから子育て中の実感を言葉や文章にしてもらった。

今まで、言葉に出さなかったような気持ちを表に出すことで初めて自分の気持ちに気づいたり、だからこそ戸惑ったり。自分の言葉に他の共感を得ることで、自分ひとりだけではなかったという安堵感を得たり、ただひたすら普通の生活を送ることに専念しているだけでは見えなかったであろう、大切なことに気づき始めた。

膨大な数の言葉たちが表出してきた。ひとつひとつの表面的な言葉から、そこに含まれる意味をみんなで考え、質問文として練り上げ、さらにアンケートとして限られた数に絞っていく作業に時間と労力を要した。

また、アンケート内容に偏りが無いよう質問文を考えるのに時間がかかり、何度も話し合いを重ねた。アンケート作成に向けた話し合いでは、非常に多くの言葉や気持ちが出た。その話し合いの議事録の一部を資料-99～102 ページに掲載する。

3. 調査内容

調査内容は次の項目とした。（資料-1 ページ参照）

- A) あなたのことを教えてください
（年齢、性別、職業、地域活動への参加、家族構成、居住地域）
- B) 子どもイメージについて
- C) 妊娠・出産について（23問）
- D) 子育て・生き方について（60問）
- E) 子育てエピソードについて
（1）子ども同士のトラブル（16問） （2）地域の子どもの関わり（14問）
- F) 子育て支援について
- G) 自由記述

4. アンケートの配布・回収について

アンケート配布は機縁法で、彩の子ネットワークのネットワークを使って、県内の子育てサークル・ネットワークと子育て支援センターの協力を得て配布する他、自分たちの家族、親戚、知人を伝手に回答を頼んでいった。回答する質問数が多くて記入が大変だと予測していたが、新聞に掲載し実行委員会への参加を呼びかけたこともあり、よりたくさんの人にアンケートを受け取ってもらうことができた。

(1) アンケートの回収率

2009年2月末現在、アンケートの配布数は4292通、回収数は、2629通。ここでは、分析スケジュールにより、女性の有効な回答が2000件に達した時点で、分析を始めた。男女含め2312件について、分析を進めた結果を報告する。

- 回収率：61.2% （回収数 / 配布数）
- 有効回答率：87.9% （有効回答数 / 回収数）

5. 分析結果

女性 2000 件、男性 312 件を有効回答として分析する。

主に女性の回答について分析していく。

男女の比較では、女性の回答を軸に男性の回答と比較する。

分析の対象設問は、設問 A～E とし、設問 F 子育て支援については、集計結果を報告する。

(1) 因子分析について

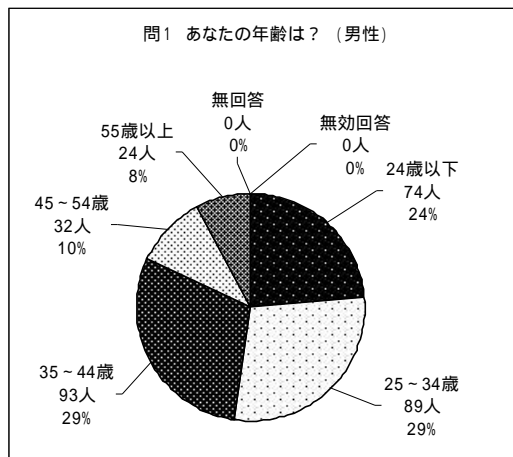
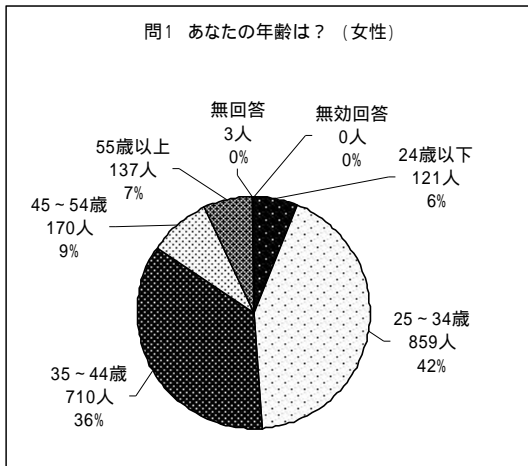
回答の分析において“因子分析”を用いるので、ここで説明しておく。

因子分析とは、回答の傾向から、質問をいくつかのグループに分ける手法で、意識調査では一般的な分析方法。分けられたグループそれぞれの中に潜む共通した何か（因子）を探る。因子の意味するところを言葉にし（ラベル付け）各因子の意味や因子同士の関係から、ばらばらに見えた質問群を構造的に捉えなおすことができる。

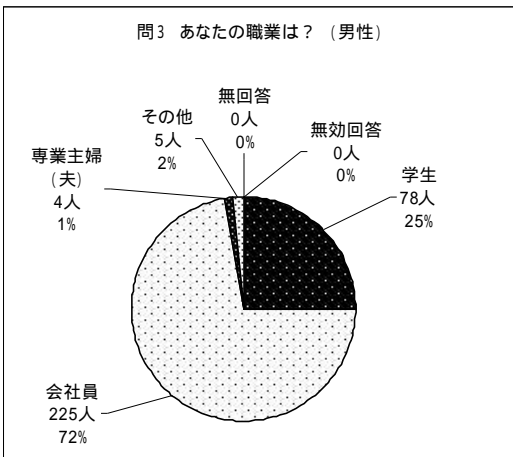
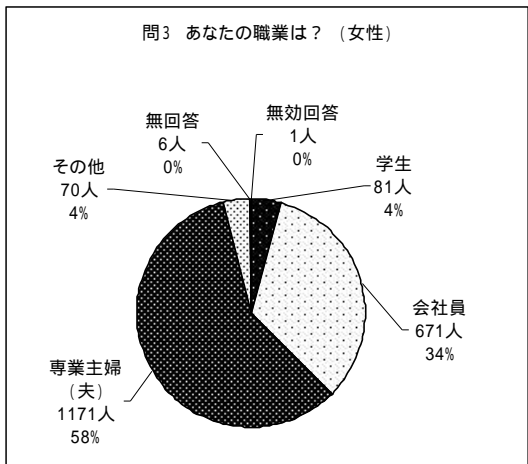
なお、因子の抽出は、“SPSS V.17”（OS: Windows Vista）にて「主因子法」で行う。

(2) アンケート回答者の内訳（設問 A）

年齢区分で最も多かったのは、女性が 25 歳～34 歳（859 人）、男性が 35 歳～44 歳（93 人）、次いで多いのは、女性が 35 歳～44 歳（710 人）、男性が 25 歳～34 歳（89 人）。子育て世代が最も多いと言える。（資料-46～47 ページ参照）



職業別の割合を見ると、女性は「専業主婦」（1171 人）が最も多く、次いで「会社員」（671 人）。男性は「会社員」（225 人）が最も多い。



子どもの有無をみると、女性で子どもが「いる」のは 1801 人で女性全体の 90%。男性で子どもが「いる」のは 214 人で男性全体の 69%だった。女性で子どもが「いる」と答えた中で、一人目の子どもの年齢が 12 歳以下の人数は 1418 人で、女性全体の 71%にあたる。

(3) 子どもイメージについて（設問 B）

女性と男性の比較

女性と男性を比べると、女性の方が、子どもに対し多くのイメージを持っている。（資料-48 ページ参照）一番回答が多かったのは、男性も女性も「かわいい」。その次は、「元気」「面白い」「好奇心」「いやされる」。上位 5 位までは男性と女性と同じ順位。

男女の差が一番顕著なのは、「待ったなし」。女性の方が男性より、15.4%肯定回答が多い。

男性が女性より回答が多い項目は、「よく泣く」「危なっかしい」「わがまま」「生意気」「飽きっぽい」「半人前」「後継ぎ」「投資」。

6 番目に男性の回答が多い項目は「危なっかしい」。男性は 47.4%、女性は 43.0%と、男性が女性より若干高い割合で回答している。

7 番目に男性回答が多いのは「よく泣く」。男性 44.2%、女性 43.5%と男性の方が若干高い割合で回答している。

女性の 6 位、7 位は、「素直」「手がかかる」。

「待ったなし」がキーワード

男女の差が一番顕著だった「待ったなし」について次のように話し合った。子どもに対応することは「待ったなし」なんだという実感を女性の方が男性より持っていて、それだけ女性の方が子どもに対応している。女性の方が子育てを担っている。女性は、「子どもは待てない」ということを知っている、ということではないか。子どもを理解するうえでのキーワードになるだろう。

因子分析より

女性 2000 件の回答について、因子分析を行った。

子どもイメージについては、6 つの因子に分かれた。それらにラベルを付けた。（資料-66 ページ参照）

- 第 1 因子 子どものチカラ
- 第 2 因子 子どものここがイヤ
- 第 3 因子 子育ての大変
- 第 4 因子 やっぱりかわいい
- 第 5 因子 見返り期待
- 第 6 因子 元気

第 1 因子「子どものチカラ」を選ぶ人は、他のすべての因子を選ぶ傾向がある。

第 2 因子「子どものここがイヤ」と、第 3 因子「子育ての大変」が、最も関係が強く、「子どものここがイヤ」と思う人は「子育ての大変」も感じやすい。

女性に比べて男性が選びやすいものは、第 5 因子「見返り期待」の質問すべてと、第 2 因子「子どものここがイヤ」のいくつかの質問「生意気」「わがまま」「飽きっぽい」「残酷」。

第 3 因子「子育ての大変」の 3 つの質問の中では、「危なっかしい」は男性の方が女性より肯定回答の割合が高く「手がかかる」は女性の方が高い。

分析の話し合いでの意見

「夫は、子どものちょっとした行動に『危ない』ということが多く、自分がそれに対応しなくてはならなくなる。それって、夫を通して子どもに対してやるが増えてしまう。夫に手がかかるのと同じだなんて思う」という意見があり、他のメンバーの多くがうなずいていた。

(4) 妊娠・出産について（設問 C）

男女とも最も「大いにそう思う」が多かったのは

「17.自分だけががんばったのではなく、子どもと一緒に頑張って生まれたのだ」・女性 74.2%、男性 57.7%（資料-49 ページ参照）

因子分析の結果から

因子分析の結果、妊娠・出産についての気持ちに 8 つのタイプ（因子）があることが見えてきた。

第 1 因子 妊娠・出産に主体的 （資料-61 ページ参照）

第 2 因子 妊娠・出産を素直に喜べない

第 3 因子 当然と思われていること

第 4 因子 出産がゴール

第 5 因子 自分で決めたい

第 6 因子 自然分娩神話

第 7 因子 怖くなく出産したい

第 8 因子 子どもの障害は自分の責任

女性と男性で比較してみる

（資料-67 ページ参照）

第 1 因子「妊娠出産に主体的」は女性のポイントが高い。

第 3 因子「当然と思われること」は男女差がない。

第 2 因子「妊娠出産を素直に喜べない」第 6 因子「自然分娩神話」、第 7 因子「怖くなく出産したい」は男性のほうが高い。

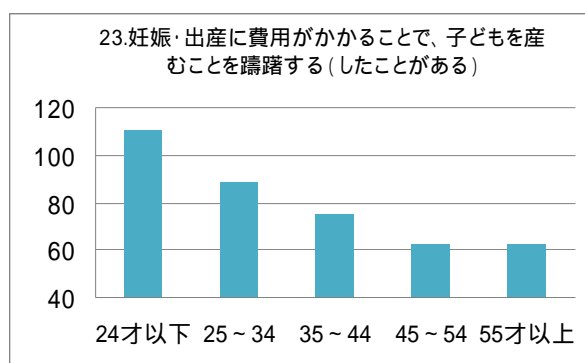
第 2 因子「妊娠出産を素直に喜べない」は概ね男性が高いが、「18-男性は妻(パートナー)の出産より、仕事のほうが優先だ」のみ男女差がない。

女性の世代間での比較をみる

（資料-71 ページ参照）

世代間で差（バラつき）があるのは、

- ・第 2 因子「23-妊娠・出産に費用がかかることで、子どもを産むことを躊躇する(したことがある)」(年代が若いほど高い)



世代間で差がないものは、

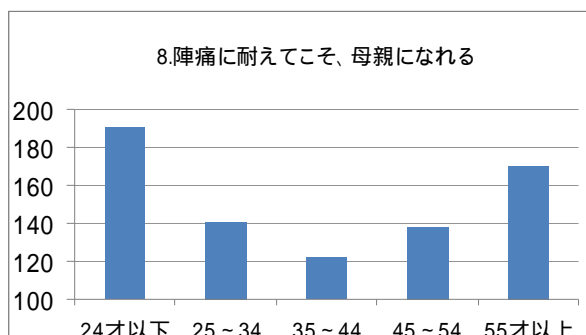
- ・第 1 因子「13-好きな相手から求められても、セックスしたくない時はノーといえる」

若い世代と年配の世代のポイントが高いもの

- ・第 6 因子「8-陣痛に耐えてこそ、母親になれる」

- ・第 6 因子「3-自然分娩できなければ、スタートから挫折した気持ちになる」

- ・第 7 因子「14-出産するところは、万が一に備えて、総合病院など医療設備が整っているところがいい」



若い世代だけがポイントが高いところ

- ・第1因子「7-お腹が大きくなるのが恥ずかしくて隠したい気持ちになる」24歳以下が高い
- ・第5因子「15-自分がリラックスできる体位や場所を出産したい」24歳以下が高い
- ・第7因子「2-リスクが予想されても、自分が痛くないこと(無痛分娩)が優先される」24歳以下が高い

みんなで話したこと

・「17.自分だけが頑張ったのではなく、子どもと一緒に頑張って生まれたのだ」は男女とも最も「大いにそう思う」が多かった(女性74.2%、男性57.7%)。子どもの人権にも触れる質問で、肯定率が男女とも高いのは嬉しい結果だといえる。だが、現実の社会では、出産のときに自ら生まれようとする力を持つ赤ちゃんたちなのだということを本当には理解されていないために、赤ちゃんが何もできないお世話されるだけの存在として捉えられやすいのではないか。また、出産の現場でも、赤ちゃんが『どうがんばっているのか』説明されないまま、符丁のように「赤ちゃんもがんばってるのよ」と聞かされ、「世間的にそういうもの」というところで肯定しやすい価値観の質問ともいえる。

・一番男女差が大きいのは、「13-好きな相手から求められても、セックスしたくない時はノーといえる」であり、女性が男性より高く、性に対して主体的に生きたい女性の姿が見える。男性は、「9-避妊を話し合える関係があつてこそ、セックスを楽しめる」についても「13-好きな相手から求められてもセックスしたくない時はノーといえる」と同じ割合で回答している。しかし、女性は「9-」の方が「13-」より強い肯定回答が低くなっている。「避妊を話し合える関係」の肯定回答が低くなっていることから、「セックスしたくない時はノーといえる」ということ自体が、「自分もパートナーも大切にすること」や「子どもが生まれたならば、自分の子どもとして引き受ける(望まれて生まれる)」とつながって考えられていない可能性がある。意に沿わないセックスによる望まない妊娠、その結果としての中絶が20~30歳前半に多い事実から、女性が主体性を持つことが大切であると話しあった。

また、「13-」は世代間で差がなく、全体的に高いことから、各世代における理由は様々としても、セックスレスの時代が背景にあるのではないだろうか。特に、若い世代では情報消費社会の中で1対1のやり取りを回避するところでの「ノーといえる」なのかもしれない。それに対して、「9-」は世代間のバラつきがあり、年配世代になるほどポイントが低くなっていることから、「ノーといえる」理由が年配の世代にとっては、明確に「自分の意思を尊重する」ことなのではなく、パートナーに対しての拒絶や諦め、また、閉経した女性の場合終わったこととして回答されているのかもしれないと話した。

・若い世代と年配の世代の価値観が似ている第6因子「8-陣痛に耐えてこそ、母親になれる」、第6因子「3-自然分娩できなければ、スタートから挫折した気持ちになる」、第7因子「出産するところは、万が一に備えて、総合病院など医療設備が整っているところがいい」は、男女差では男性のポイントが高い。若い世代、年配の世代、男性の価値観は似ていることがわかる。このことから、若い世代及び男性のほうが、古い価値観に縛られている傾向がうかがえる。

男性は、「23-妊娠・出産に費用がかかることで、子どもを産むことを躊躇する(したことがある)」も高い。どちらかというと、夫の役割としての経済的な面に関心が向いている。しかし、「18-男性は妻(パートナー)の出産より、仕事のほうが優先だ」に、男女差がないことから、女性も、それを当然の事として受け入れざるを得ない現実がある。そして、それは、子育ての中でも見られる。

・男性は第6因子「自然分娩神話」のポイントが高いのに対して第7因子「怖くなく出産したい」に対してもポイントが高い。自分が出産の痛みを経験することを考えると、男性は、「自分が痛くないこと」を優先させている。妻・パートナーには「陣痛に耐えてこそ」と言っておきながら、「リスクより痛くないことが優先」といっている。これらの質問群は世代別で見ると、24歳以下の若い世代と、年配の世代も

男性と同じような価値観を持っていることがわかる。前回のアンケートでも、同様の結果を得ているが、若い世代及び男性のほうが、古い価値観に縛られている傾向がうかがえる。

・第2因子「23-妊娠・出産に費用がかかることで、子どもを産むことを躊躇する(したことがある)」については、若い世代にいくほどポイントが高く、男女差では男性が高い。これは、現在の不況による経済状況や、貧困に拠る教育格差を反映するものと思われ、子どもを生き育てにくい時代ということが伺える。

(5) 子育て・生き方について(設問D)

因子分析の結果、60の質問から、私たちの中に8つのタイプ(因子)があることが見えてきた。

第1因子 みんなで子育て

(資料-62~63 ページ参照)

第2因子 育児の悪循環

第3因子 自分らしく生きたい

第4因子 今どきの子育て

第5因子 一人で背負う子育て

第6因子 体罰容認

第7因子 パートナーへの不満と諦め

第8因子 子どもの存在が嬉しい

これは、アンケート回答者たちが8つのタイプ(因子)に分かれるということではなく、一人ひとりが、強弱があるにしろ、その8つを持ち得ているということでもある。中には一つの因子に偏って生きている人もいる。因子同士には、関係の深いものや、反する関係のものなどがある。

因子分析結果から、第1因子「みんなで子育て」は、

- ・ 多くの人が肯定していて、みんなが望んでいること
- ・ 第3因子「自分らしく生きたい」と第8因子「子どもの存在が嬉しい」に相関
- ・ 第5因子「一人で背負う子育て」に反相関

という特徴がある。

女性と男性で比較してみる

(資料-68 ページ参照)

回答を得点化した女性と男性の比較を見ると、全体的に女性の得点が男性よりも高い。その差が目立つ質問は、

- ・ 58-つらいときは赤ちゃんと一緒に泣いてもいい
- ・ 4-ひとりでゆっくり食事をして、トイレに入って、お風呂に入りたい
- ・ 15-仕事をしているときは、子どもや家族から開放される貴重な時間だ (最も差が大きい)
- ・ 37-子どもの泣きやぐずりには、父親はつきあいきれないと思う
- ・ 17-自分の人生を大切に生きようと思ったら、離婚も時には選択肢のひとつになる

である。「4-ひとりでゆっくり食事をして、トイレに入って、お風呂に入りたい」「15-仕事をしているときは、子どもや家族から開放される貴重な時間だ」の得点が女性の方が高いのは、家事や子どもの世話に多くの時間を費やさざるを得ない現実の中、自分の時間が欲しい、という実感を男性よりも強く感じていると思える。

他の差が目立つ質問については、その差の意味を探る話し合いをする余地がある。

全体的に女性の方が得点が高い中、第6因子「体罰容認」は男性の方が高い傾向がある。これは、男性(父親)が、子どもやその母親に対して厳しく、結果として追い詰める要因となり得るのではないか。そこには、根強い男尊女卑や性的役割分業といった構図が見える。

第5因子「一人で背負う子育て」は差が少ない。

女性の年代比較をみてる

(資料-72 ページ参照)

年代で差が最も目立つ因子は、第4因子「今どきの子育て」。若い世代で得点が高く、年配世代で低いという傾向がある。

次いで、第3因子「私らしく生きたい」が年代間で差が目立つが、質問によっては、差の無いものもあり、一概に若い世代が高く、年配世代が低いとはいえない。質問一つ一つ丁寧に見る必要がある。現時点ではそこまで話し合いきれていない。

全年代で得点が接近している質問よりも、差のある質問の方が多い。これだけ差があるということは、年代間で考え方のすれ違いや衝突が起こるのも当然といえる。だから、どうすると良いのか、年代を問わずみんなで一緒にみつめていきたい。

第1因子「みんなで子育て」に注目

(資料-76~77 ページ参照)

この因子は、一人ひとりを尊重し、子どもも自分も周囲もすべてを受け止めて、みんなで子育てしようという気持ちが表れている。女性のどの年代でも高く、本当はこうありたい子育て・生き方のヒントがあるのではないだろうか。

この因子に強く肯定する人は、子どもイメージに対して「子どものチカラ」に肯定する傾向がある。妊娠・出産については、「妊娠・出産に主体的」に肯定する傾向がある。子育て・生き方については、「自分らしく生きたい」に肯定する傾向がある。しかし、「パートナーへの不満と諦め」や「育児の悪循環」も感じており、現実育児の疲れを抱えている。「今どきの子育て」も気になっている。「体罰容認」の「43-叩いても愛情は伝わる」に肯定傾向が見られることから、子どもを叩かざるを得ない状況におかれ葛藤している女性たちの姿がうかがえる。

設問 E)のエピソード質問との関係を見てみると、「親の責任追及」には否定傾向だが、「世間体重視」には少ないが肯定もあり、どうしても人の目を気にしてしまう、世間体を捨て切れない葛藤も見える。「地域で支える子育て」と「虐待は社会全体で考えること」には肯定傾向があり、「子育ては親の責任」にはどちらかという否定的である。こうした結果からも、第1因子は、みんなで子育てしていこう、していきたいという気持ちがうかがえる。

第4因子「今どきの子育て」に注目

(資料-78~79 ページ参照)

年代比較グラフをみると、最も年代で差が開いた因子である。若い年代が得点が高く、年代順に得点が下がっている傾向があることから、「今どきの子育て」と言えよう。

うまく楽に子育てをしたくて、仲間を作ったり、いろんな情報を得たりしているが、実は、いろんな情報(雑誌、テレビ、インターネット、ママ話など)に振り回されて苦しくなっているのではないだろうか。そう感じたのは、他7つの因子の中で、最も第2因子「育児の悪循環」と関連しているからである。今どきのやり方で楽しんでいるはずなのに、子育て中のイライラを強く感じている。

話し合いの中で、「育児の悪循環」を感じてきた親(団塊)世代に対し、そうはならないぞ!と「今どきの育児」を楽しんでいるつもりが、実は「今どきの、楽しくやらなくちゃいけない育児」に縛られていることに、気づいた母親がいた。すごい発見だ。今どきの育児の苦しさはそこにある。自分が縛られていると言うことは、子どももある枠で縛っている可能性があり、それが、子どもイメージでの答え方ではっきり出てきた。

この因子に強い肯定傾向がある人は、子どもイメージに「好奇心」「元気」が無い傾向があった。「しつこい」「わがまま」「手がかかる」と思う傾向が強い。周りから入ってくる様々な情報から、いわゆる「いい子像」イメージを強く持って、それとギャップのある現実の我が子に、「子育ての大変」や「こどものここがイヤ」を強く感じてしまう。本来の子どもの姿を捉えられない、知らず知らずのうちに子どもを人形のように捉えてしまう危険があるのではないか。

妊娠・出産についてみると「当然と思われていること」に目立った肯定傾向がある。次いで、「子どもの障害は親の責任」に肯定傾向がある。その因子の中でも「20 子どもを産んでいない人には育児の大変さはわからない」は強く肯定していて、自分と同じ大変さを体験している相手と対話したい、つまりは「45 子育ての苦勞を共感できるママ友がいないとつらい」に繋がるのではないだろうか。

エピソード質問を見てみると、「子どもの気持ちを尊重」や「地域で支える子育て」よりも「世間体重視」に肯定傾向がある。これは、周りからの縛りに合う結果、自分や自分の子どもが枠からはみ出ないことが優先される。すると自分や子どもに厳しくなり、自分の親としての責任も感じやすくなる。更には、その感覚が他者へも投影されるという結果が「親の責任追及」への肯定傾向に表れているのではないか。

「今どきの育児」を考えると、私たちが“消費社会”にいることを考えずにはいられない。妊娠・出産・育児とあらゆる段階で、「妊娠したらこれが必要で、出産にはこれだけ揃えれば安心、0歳児にはこれが便利、1歳児にはこれ、2歳になったら・・・」と様々な商品が年々増えてはいるだろうか？不要なものまで、買わされていないだろうか。

初めての育児に不安や孤独を感じる私たちは、とりあえず、商品を揃えることで、安心する。しかし、“商品”では本当の孤独や不安は解消されない。「ママ友」もその商品と同じレベルになっていないだろうか。携帯電話のアドレス帳にママ友がいることで安心する。自分と同じ気持ちを知っていることで安心する。でも、それだけでは、本質的なところは解消されていないから、育児のイライラが減らない。友達が多く、付き合いが多いママほど消費が増えるというマーケティングリサーチがある。企業にとっては格好のマーケットかもしれないが、その“消費”は不安や孤独、寂しさを紛らわすだけにすぎない。“消費”で、孤独や不安をカモフラージュされていないか。本当はどこか孤独を感じている、にもかかわらず、自覚できていない私たちなのではないだろうか。でも、そうやって、不安や孤独を紛らわさないと言っていない現状もある。その不安や孤独感はどこからくるのか。

この因子「今どきの子育て」は、子どもイメージが“いい子像”に傾いていること、親としての責任を感じやすいこと、世間体重視なこと、から、「子育てはこうでなくてはいけない、それができないのは私の責任」と思い込む傾向がありそうだ。第5因子「一人で背負う子育て」にも関連していることから、いろいろ楽しもうとしているが、実は自分の殻に閉じこもりがちなのかもしれない。

しかし、第1因子「みんなで子育て」、第3因子「私らしく生きたい」、第8因子「子どもの存在が嬉しい」にも関連があることから、自分の気持ちを大切にしながら、周りとの関係も持ちつつ、子どもとより良い関係作りをするにはどうしたらいいかを探っている感じがする。どうしたらいいかを探っているとき、目の前にあったのが、消費社会の中の「今どきの育児」だったのかもしれない。

第5因子「一人で背負う子育て」に注目

(資料-80~81 ページ参照)

この因子は、「13 子どもがいたら、子どもを最優先にして、自分のやりたいことは我慢すべき」という質問が最も代表的なものとなっている。「53 パートナーとは波風たたないように暮らすほうがいい」という質問もあり、育児や家庭生活において、自分さえ我慢すればよいと、自分を犠牲にしていることがわかる。そして、「10 子育ては私事であり、できるだけ親や家族で担うべきだ」「27 母親なら子どものことをなんでもわかっているはず」「52 自分がいなければ子どもは生きていけない」と、自分の責任を強く感じている。責任を感じるがゆえに、トラブルは起こしたくないので、外部との関係を持ちにくい状況に陥っているのではないだろうか。自分の中でなんとかしようとする“囲い込み育児”になりやすいともいえる。

話し合いの中で、「社会から孤立している感じで、つらい感じ」と発言があったが、こういう状況でしか過ごすことができない、あるいは、そうすることで自分自身を守っている母親たちもいるのではないか。そういう気持ちが実は自分たちにもあるな、とみんなで話し合った。

この因子に強く肯定する人の子どもイメージはどうか。全体的に、子どもに対するイメージがないことがわかった。「子どものチカラ」、「子どものここがイヤ」も、どちらも、当てはまるイメージがないようである。第1因子「みんなで子育て」に強い肯定傾向のあるグループが多くイメージを持っているのと、反対の結果である。話し合いでは「子どもらしさが出ないように育てているのかも。子どもらしさを押さえつけている感じがする」と話した。

第6因子「体罰容認」に肯定傾向が出ていて、子どもを厳しくしつける傾向があることから、子どもを押さえつける感じが読み取れる。エピソード質問を見てみると、「親の責任追及」に肯定傾向があり、虐待については関心が無いように読み取れる。しかし、「体罰容認」傾向があるので、知らず知らずのうちに虐待をしている傾向があることを否定できない。

第4因子「今どきの子育て」に関心があると読み取れる。「今どき」=「人並み」という枠から外れないように、一人で何とかしようとしているように見える。

妊娠・出産の質問では、「当然とされていること」「子どもの障害は親の責任」に肯定傾向がはっきり現れていて、これは第4因子「今どきの子育て」と共通している。最も肯定傾向があるのは「19 陣痛に耐えてこそ母親になれる」であり、ここでも、「自分が我慢すれば」という気持ちが強く表れているといえる。

そして、第2因子「育児の悪循環」への肯定傾向もあり、育児中の疲れも感じている。

第2因子「育児の悪循環」と第4因子「今どきの子育て」と第7因子「夫への不満と諦め」の相関

因子分析すると、因子同士の相関の度合いを表す行列（因子相関行列）が算出される。それをみると、第2因子「子育ての悪循環」は第7因子「夫への不満と諦め」に強めの相関があり、次いで第4因子「今どきの子育て」に相関がある。第2因子「育児の悪循環」は、母親一人で頑張っていて、疲れとイライラが溜まっている感じがする。協力して欲しいのに思うように協力を得られない夫への不満が募り、その解消先が、第4因子「今どきの子育て」の「ママ友」付き合いや流行への“消費”となっている感じがする。この3つの因子の関係には、「育児は女性の仕事」という意識が女性の中にも根強く潜んでいることが感じられる。「育児は私がしなくては、夫に迷惑をかけてはいけない」、そういう思いの表れではないだろうか。（資料-63 ページ参照）

エピソード質問（設問E）との関係から見えること

エピソード質問の因子との関係から、8つの因子が大きく二つの傾向に分かれることが見えてきた。前述の因子相関行列にもその傾向が見えるものの、はっきりしない。エピソードの因子との関係から、よりはっきりしたものが見えてきた。

（資料-82～85 ページ参照）

<エピソード質問の因子>

エピソード1 「子ども同士のトラブル」の因子

- 第1因子 子どもの気持ち尊重
- 第2因子 親の責任追及
- 第3因子 親としての望み
- 第4因子 世間体重視

エピソード2 「地域の子どもの関わり」

- 第1因子 地域社会で支える子育て
- 第2因子 子育ては親の責任
- 第3因子 虐待は社会全体で考えること

第1因子「みんなで子育て」と第3因子「私らしく生きたい」と第8因子「子どもの存在が嬉しい」に強い肯定傾向のある人は、「子どもの気持ち尊重」と「地域社会で支える子育て」にも強い肯定傾向がある。そして、「親の責任追及」「子育ては親の責任」に否定傾向。

このグループと反対の傾向にあるのが、第2因子「育児の悪循環」、第4因子「今どきの子育て」、第5因子「一人で背負う子育て」、第6因子「体罰容認」、第7因子「夫への不満と諦め」のグループである。「子どもの気持ち尊重」と「地域社会で支える子育て」に肯定がごく少なく、「親の責任追及」「子育ては親の責任」に肯定傾向がある。この結果から読み取れることは、「体罰容認」に肯定する人と回答傾向が似ていることから、このグループは、無意識のうちにも虐待に陥りやすい傾向を持っているということではなかろうか。

因子	個々に責任を押し付けるのではなく、お互いに支え合いたい
因子	「体罰容認」傾向 虐待の危険

(6) ここまでのまとめ

これまでの分析から、自分がどうしたいのか、目の前にいる相手がどうしたいかよりも、昔からある社会通念や、周りから与えられたものによって、自分も相手も判断し、合わないものは排除してしまいがちな私たちがいることが見えてきた。

第1因子「みんなで子育て」で、理想的とも言える子育て・生き方が見えてきたが、そうなりきれない現状がある。第4因子「今どきの子育て」からは、実は苦しくなって子育てしている私たちが見えてきた。

育児で苦勞を感じているとき、一見、子どもに原因があるように思えて、なんだかうまくいかないイライラが子どもに向いてしまう。そこには虐待の危険性が潜んでいる。本当の原因は「主体的に生きられないでいる」自分自身にあるのではないか。自分の気持ちを周囲に理解してもらえなかったり、自分自身で決められなかったり。しかし、人生のどのタイミングでも自分外の評価軸で判断され自分もそうし

てきた私たち。「あなたは、どうしたいの？」と問われることもなく、自分自身でもその問いに蓋をしてきたのではないだろうか。本当は自分がどうしたいのか、自分でもわからなくなっている私たちがいるようだ。

子育ての苦労は子育てにあらず。自分がどうしたいかを本気で考えるときが来た！ 私たちと一緒に考え、見つけていきましょう。

(7) 子育て支援について（設問 F）

（資料-25、55～59 ページ参照）

問 1「あなたの子育てを国や世の中が応援していると実感できますか？」

「はい」は全体の 42.1%、「いいえ」は 55.4%。10 年前のアンケートで同様の質問をしたときの「はい」17.4%、「いいえ」77.4%に比べると、子育てを国や世の中が応援していると実感している人が増えていることがわかった。10 年前より国や世の中から何らかの支援を受けることが出来ていることをあらわしているのだろうか。

男性と女性で比較してみると、女性の方が「はい」と答えている割合が 5.0%高い。また、女性年代別では、25 歳から 54 歳までにかけては「はい」が 40.0%を越えているのに対し、24 歳以下と 55 歳以下は 27.3%、33.6%という結果になっている。

これらの結果から子育ての当事者が女性であることが多いこと、そして子育て世代がより実感していることが分かる。

問 2「国や行政で行っている子育て情報や子育て支援は必要な所に届いていると思いますか？」

「はい」は全体の 19.0%、「いいえ」は 78.8%。この結果を問 1 と比較して注目してみると、42.1%の方が国や世の中が応援していると実感しているはずなのに、必要なところに届いていると思っている方がわずか 19.0%であり、この差はどういうことをあらわしているのだろうか。近年、国が「子育て支援、子育て支援」とうたっているのに影響されて、現実とは違っても応援されていると思いこんでしまっているのだろうか。

あるいは、国や行政の情報や支援は自分達から求めていかなければ与えられない、知らないでしまうことが多く、問い合わせや申請などした自分のところには届いているけれども、他にもっと必要としている状況の人がいるはずなのに、その人達には届いていないと感じているのだろうか。この差をどう捉えるのか考えてみたいところである。

問 3「あなた自らが、子育て支援の場での企画・運営に関わる機会がありますか？」

「はい」と答えた方は全体の 25.2%、「いいえ」は 73.2%。男性と女性で比較してみると、「はい」が女性が 27.6%であるのに対し、男性はわずか 9.9%であり、子育て支援に関わる機会の少ない現実が表れている。また、女性年代別では、現在子育て中と考えられる 44 歳までよりも、子育てを一度経験したり、子育てがひと段落したと思われる 45 歳以上が関わる機会を多く持っている結果となっている。

問 4「あなたはどのような子育て支援に関わりたいですか(複数回答可)」

女性の 5 割以上が選択している項目は「1.サークルなど、子育ての仲間づくり」58.2%と「5. 子育て談話室などの、自分の気持ちや子育てのことを話せる場」53.3%である。これに対し、男性は 34.3%、22.8%と低い。

「1.サークルなど、子育ての仲間づくり」を最も多く選択している年代は 25 歳～34 歳（66.8%）である。設問 D)子育て・生き方についての「45.子育ての苦労を共感できるママ友がいないとつらい」に肯定している女性は 7 割以上で、年代別の比較をみると、25 歳～34 歳が最もポイントが高い。このことから、子育て中の母親たちは、気持ちを共有できる仲間が必要だと感じているといえる。

「5. 子育て談話室などの、自分の気持ちや子育てのことを話せる場」は、25 歳以上の女性の 5 割以上が選択している。“自分の気持ちを話せる場”とは、どんなところかを考えてみると、設問 D)子育て・生き

方についての第 1 因子の「D29-家族に限らず、子どもの成長を共に喜び、見守り、私の背中を押してくれる存在は、私が私らしく生きていくうえで必要不可欠だ」「D42-子育てが辛いときに支えになるのは、原因究明してくれる専門家ではなく「ひとりじゃない」と思わせてくれる人の存在だ」の肯定回答が多いところに答えがあるような気がする。

“自分の気持ちを話せる場”では、良い面も嫌な面も共感を持って受け入れられ、一緒に考えることのできる存在が求められている。“仲間作り”だけでは、表面上の付き合いや、「今どきの子育て」に振り回されている感じがあるが、仲間を作って、サークルを作って、何がしたいのか、を考えると、“自分の気持ちを話せる場”を求めているのではないだろうか。

また男性と女性の比較で、男性の方が回答が多かった項目は「3.イベントや催しづくり」34.9%で、男性は、日常の子育てよりも、子どもと一緒に何か楽しめるという特別なことに興味があるように思える。「5.子育て談話室などの、自分の気持ちや子育てのことを話せる場」を選んだ男性が22.8%と低いことから、“自分の気持ちを話せる”ことよりも、非日常的な楽しいことに関心があるのではないだろうか。子どもと過ごす時間の多い女性は、特別なイベントよりも、毎日毎日のいろいろな気持ちを話せることが大切だと感じているのではないだろうか。

問5「あなたは、どのような「子育てネットワーク」があったらいいと思いますか(複数回答可)」

男性と女性の比較で、男性の方が回答が多かった項目は「父親たちでつくるネットワーク」(女性19.1%、男性28.5%)で、女性が考える以上に男性は子育てに関わりたいと考えているのではないか。しかし、男性が女性よりも「父親たちでつくるネットワーク」を選択している理由として“男だけ”でやりたい気持ちがありそうだ。そこには、男女の溝の深さが感じられる。

25歳から44歳までの回答者が他の世代と比べて多く選択した項目は「8.子育ての当事者から始まり、誰もが参加できる『みんなで子育て』に向けたネットワーク」である。子育ての当事者が一番“みんなで子育て”を望んでいるといえる。

“みんなで子育て”とはどういうことか、それは設問D)の分析結果、第1因子「みんなで子育て」にヒントが見えている。

6. 結果発表会

2009年3月15日、埼玉県県民活動総合センターにて、アンケートの結果発表を行った。結果報告後、出席者とディスカッションを行った。

<出席者>

- 鈴木玲子（NPO法人彩の子ネットワーク共同代表）
- 渡邊寛（NPO法人彩の子ネットワーク共同代表・日本こども家庭総合研究所嘱託研究員）
- 西川美保（アンケート実行委員長、NPO法人彩の子ネットワーク運営委員）
- 飯島愛（アンケート推進室長、NPO法人彩の子ネットワーク運営委員）
- 石原香代子（NPO法人彩の子ネットワーク運営委員）
- アンケート実行委員
- 一般参加者

<ディスカッションの記録>

(アンケート実行委員 Yさん)

私はアンケート作成の時から今日まで、ずっと仲間に入れて頂いてやってきたんですけど、私が皆さんと今日ここで話したいと思ったことは・・・今日決めてきたんですけど数日前にあった実体験です。このアンケートをやってきて、本当に毎日バタバタした生活を送りました。なのでイライラもしてましたし、疲れていました。でもやりぬきたいという気持ちでやっていました。3日くらい前かな？いつも子どもをお風呂に入れてくれるのは夫なんですね。そしてお風呂から上がった子どもを、私が脱衣所で着替えさせてというような感じでしているんです。

子どもはSとって、1歳8ヶ月なので当然かもしれないんですが、その日もお風呂から上がって、服を着るのはイヤ。オムツをはかせるのは何とか出来るけど、シャツ着せても脱ぐ、「じゃあ自分で着れば」と言っただけでイヤだ。もう本当に進まないし、風邪ひかれても嫌だし、もう何とか進めたいって思っていました。そしたら私、「もうS、早く、もうー！！」って手を挙げたんですよ。挙げたらいいです。私、気づかなかったんですよ。途中で夫は上がって来てたんですけど。そうやりながらも、その日も何とか過ごしました。それがあった翌日くらいかな。Sが寝ていたの、夫と二人で夕飯を食べていたんですよ。そしてこのアンケートのことで「お前がやりたいのをやるのはいいよ。だけど子どもにあたるなよ。お前昨日、風呂場でSに手を挙げただろう」と言われたんですよ。私、それを聞いて、えーっ？いつ？って思ったんですよ。手を挙げていることに気づいていなかったんですよ。いつの場面だろうって思いつかなかったんですよ。でも確かにあったかもしれない。夫はその手を挙げた私を見て「俺、びっくりしたよ」の一言のコメントだったんですけど。私、言われたときに思い出せないけど、あったかもしれないって。そのあったかもしれないっていうのは、私、普段でもそうなんですよ。実際、Sを叩くことはしない。でも「もーっ」って手を上げることはしょっちゅう。その手をテーブルに叩きつけたり、その手を下ろして別の部屋に行って「もーっ」って言ってたり。だから、あったかもしれないって気持ちと、あとは「私、見られちゃったんだ」とって気持ちと。普段昼間は夫は仕事に行っているのだから見られないで済んでいるんですよ、その場面を。あっ、でも見られちゃった・・・。そのコメントが「俺、びっくりしたよ」だけ。だけというか、そういうコメントだった。でもその後、私何も言えなかったんだけど、見られちゃった、嫌だなという気持ちの他に、これで分かってもらえるかなという気持ちがあったんですよ。いつもこうなんだよって。

Sもだいたい喋るようになってきたので、私がいつも「もーっ」って言ってるんでしょうね、Sも口癖のように「もーっ」って言うんですよ。それがおかしかったり、私いっぱい言ってるんだなあと思ったり。こういうことがあって夫は何か感じてくれるかなって。ひと言では分かってもらえるかなとしか言えないんですけど、そんな気持ちになりました。

みんなはどう思ってくれるかなというのと、私はその日、そしてここに来るまで夫とはそこまでしか話が出来ていないんですけど、私が口をつぐんじやったんですよ。やっぱり怖かったですよ。それ以上話すのが、何か私を責めるんじゃないかということと、やっぱりこのことを弁解したくなる私がいる

というのと、だからアンケートなんかやめればいいのに、とかアンケートをやっていることを非難されるのが怖かったという色んな気持ちがあったと思うんですけど、喋りませんでした。でも昨日くらいになってかな、ここが大切なんだなって。これ以上言えなかったのを言ってみる、それが大切なんだよなって。私はこうだったのよ、あなたは どう思うの？聞かせてよって。私はこうなのよって話せる、これが大事だなって思って。大事だなぁと 思っている ので みんなでここで話したい。残念ながら、夫は館内にはいるのですが、ここには現れませんが、話してみたいって思うんですよね。

長くなってしまったのですが、皆さんどう思いますか？皆さん、虐待とか体罰とか怖いイメージがあると思うんですけど・・・。挙げちゃっているんですよね、実際叩きはしないけど、ここまで挙げてしまう・・・そんな私って本当に毎日じゃないかなって思うんですよね。どうかかなと思って聞いてみたいと思うんですけど。何でもいいです。私は今ここまでの気持ちなんですけどどなたかにバトンタッチをしてお話を続けられたらなぁと 思ったりするんですけど。

私と同じくらいのお子さんがあるOさんとかにも聞いてみたいと思うんですけど、どうでしょう？

(アンケート実行委員 Oさん)

今のお話を聞いて、考えがまとまらないんですけど、私は日常的に手を挙げて下ろすっていうよりかは、今までになく、すごく大きな波が表れて、その時は叩く寸前までいったことはあって、だから頻繁にそういうことが繰り返されるといふよりかは、何ヶ月かに1回ドーンと。それはもう抑えきれなくて布団をかぶって絶叫するくらい。

それはもう自分ひとりでは解決できなくて夫と話しました。眼鏡とかも投げたりしてすごい状態。それを子どもに向けてはいけないとやっぱどこかでは思っていたみたいで夫と話しました。

最近、その大きな波は来ていないんですけど、でも話した内容は普段の私の生活を分かってよって気持ちだったと思うんですよ。このYさんの話に共感したっていうか、これで分かってもらえるって、すごい共感しました。まとまらないんですけど。

(石原)

やりたいことをやっているのもいいけど、子どもにあたるなっていうのが、さっきあったじゃないですか。形をかえて、私も色々言われるよなって。やりたいことをやるのはいいけど、家のことはどうしているんだとか、子どもの世話をもっとしろだとか、俺の世話をしろだとか言われるんだけども、やりたいことを、じゃあやめろって言われるのは、どうしてこの人はやれるように2人で考えてくれないんだろって。私はそう思って欲しいよって夫と話しているけど、さっき、Yさんの話も聞いて、手を挙げそうになって「俺はびっくりしたよ」って旦那さんが言ったっていうのを聞いて、そこでどうして見てたんだって私は思ってしまったんだけども。

子どもと毎日一緒にいると、自分のやりたいことと、子どものやりたいことって、しょっちゅうバッティングする。子どもが今「これをしたーい」って言っている時に、家を出たい時間とぶつかって・・・子どものやりたいも尊重したいし、私の時間も無いんだよというところでもいつもぶつかる。そこは見ているだけの夫になって欲しくないよなってよく思う。これからYさんがいっぱい話せるといいよなって。それを伝える言葉をどうやったらその人達に分かるのかっていうのを、みんなで探して、みんながちゃんと伝えられるようになりたいよなって、そんな感じ。

(飯島)

Yさんの話を聞いて、まったく私も同じ状況。今日もちょっと子どもの面倒を見てと夫にお願いしていたのですが、朝突然「俺は行かない」と言われバトルしてから、結局来てもらったんですけど、この部屋には来てくれないんですけど。

私は手が振り降りてしまうんですよ。子どもに時々。それでやっぱり後悔する。今みんなの話を聞いてても、子どもの存在が悪いわけでは全くない。子どもがいてくれて嬉しい、子どもがいるからこそなんですよ。でも子どもに向かってしまうそういう状況。そこが分かって欲しいところ。そこまで追い込まれてしまうっていうか。その手を挙げたのを見られた時も「あっ見られた」っていうことも、子どもとの間ではないところでの圧力というか、周りは圧力をかけているつもりはないと思うんですけど、周りの目に苦しんでいるんじゃないかなと。そういうなかで自分は どうしていきたいのか、夫ともどうしていきたいのか、私自身も夫と会話できるように変わっていかないといけない。私も話しかけることすら面倒くさいだとか、怖いだとか、どうせ分かってもらえない、こんなこと言ってもきつこう言い返さ

れちゃうだろうということで、会話すら持とうとしない自分もいたというところに気づいて、状況を変えるには、まず自分が変わらないといけないんだって今回のアンケートに関わって、ここが一番大きな気づきというか、本当に自分が変わる時期なんだって。今まで面倒くさいことがあるとやめちゃったり、どちらかというと逃げ腰、安全圏、大学の受験でも絶対受かるだろうっていう偏差値のところしか受けないとか、安全、安全で生きてきた。でもそうはいかなくなってきている。育ちも違う人とこれから生活を共にするだとか、またそこに子どもが産まれて、自分とは血は繋がっているけど、ひとりの人間として全く違った人とつき合っていかなければいけないということで逃げてはられない。苦しいけど自分とも向き合って、パパとも向き合っていかなければいけないってすごく気づかされたなって。もちろん夕べ夜中まで、これをまとめるのにかかって「本当にもう嫌だ。早く終わって、早く15日終わって、早くこれ終わって」って気持ちも確かにあるけど、それは表面上の気持ちで・・・実は今お腹に3ヶ月の子がいるんですけど、そういう状況でそんな残業のようなことをやっているというのを、私自身も流産したらとか心配だし、それ以上に夫は心配して、もう止めるって、その心配されることは嬉しいんだけど、やらなくちゃいけないような、ここでやめちゃったら・・・ていうすごい葛藤をしながらやってきたなあって。私の体験談みたいになってしまったけど、Yさんの話が聞けて、子どもじゃない、子どもが原因じゃない、いろんな葛藤とか思いましたね。

(一般参加 Oさん)

6年前のアクションリサーチの時に大学生だったんですけど、一緒にやらせて頂いて、今日は参加だけで来たんですけど、Yさんの話を聞いて6年前のこととか思い出していたんですけど、すごい旦那さんの言葉にショックを受けて。私、結婚はしているんですけど子どもはいなくて。「びっくりしたよ」って何で知らないんだよって思っちゃったんですけど。なんか知って欲しいって、自分のことを知っていて欲しいんだけど・・・私も色々出来ないことを出来ないって言えない私だったんですよ。今、保育所で働いているんですけど、出来ないことができないって言えなくてすごく苦しい。ひとりで背負い込む性格で。でも彩の子のときに、ここだったら出来ないって言っていいのかなって初めて思えたところで、本当にそこが切り札っていうか、それが支えて今の職業も何とか頑張れるし、子どもも好きだから頑張れるんですけど。そういう本音で話し合う、私がこう思っているんだよって話し合うって、すごい難しいんだよなあって。弁解っていうのもしたくなっちゃうし、アンケートのことも非難されちゃうって、そんなこと言われたら、もっとカッカしちゃうなっていうのも分かるけど、勇気をだして本音で話せたら違うんだろうなっていうか、いいんだろうなって思いました。

(一般参加 Mさん)

娘が「あそぼうよ」で(スタッフとして)お世話になっています。私はここに遊ばせに来ていると聞いたとき本当に良かったと思ったんですね。今、ママ友とか言ってますけど、こう範囲が広い皆さんとお付き合いさせていただいて良かったと思っていました。そしてこのアンケートの仕事を始めたと時から、ピタッと実家に来なくなっちゃいまして。孫は見たいんですけど・・・。いよいよ出来たとき見てびっくりしたんです。こんなことを主婦の方(というのは変ですけど)がやっているっていうこと。さっきも言っちゃったけど、ご主人にも犠牲払って頂いて。西川のところもパパとT(3歳)だけが遊びに来ていましたけど。言わないですけどかなり我慢してたんじゃないかと思えますけども。でもそういう中でこれだけ勉強させてもらえて、皆さんの良い体験を聞かせてもらえれば、これから先すごい為になっているんじゃないかと思うんです。ただ私達はこういう場とかももちろんなくて、本当にもう毎日、毎日が夢中だったんですね。今おっしゃった、手を挙げたとか、今だから言えるんですが、母親がちょっとひと呼吸すると楽になるんですね。今おっしゃった早く着せたい、風邪引かせたくないというにも分かるのですが、そこで1分、2分急いだからって、それよりもちょっと裸で楽しませておけばいいやくらいのそういう気持ちでやられると、自分も楽になると思う。確かに時間に追われるのは分かるんですけど。ましてやその風呂を出た後っていうのは10分急いだところで・・・裸を楽しませてやるうかというところで。私も若い頃保育園関係にいたりしたこともあったんですけど、姉もそうなんですけど、娘の育てるのを見ていて割とゆったり、私よりもゆったり育てているところがあるんですね。うらやましいなと思うくらいゆったりとしているところもあって。本当人それぞれです。男性は特に家に帰ったら奥さんに自分と子どものことを見てもらいたいって気持ちはありますから、仕事をしている方、大変だと思いますが、そこをまた割り切らないといけない。私もずっと外に出ていましたけども、もう家に帰るときは、仕事出たときは主婦なんですよ。今日のおかずは・・・この切り替えをしていかな

いとなかなか続かないし、その辺ちょっと自分を楽にするようにした方が、そうすると周りも楽になってくるんじゃないかと思います。本当に大仕事だと思って、敬意を表します。アンケートの仕事には。

(一般参加 Aさん)

このアンケートをたくさんの方に見ていただいて、参考にしていただけたらいいと思います。かなりのエネルギーを使っていると思いますので。それと私は団塊の世代で、仕事をしていましたので、ほとんど一人で育てた状態です。幼稚園、小学校と、あの頃は中学受験というのもありましたし、色々な経験をしてとにかく自分はさて置いて、とにかく育てることに一生懸命でした。毎月お医者さんも通いましたし、予防接種とか。色々な情報がありましたけれども保健センターに行って講座とかもありますので、そういうのを聞いて育ててきましたし、また沢山色々な経験しておりますけども、今子育てしているお母様達とは、また違った感覚というか。情報も沢山ありますよね。インターネットとかホームページを立ち上げたりして色々な情報を私達と違って持っていらしゃるので、一概にはこれが良いとか、これは駄目だとか言えませんので、今の時代の子育てをこのようなアンケートを参考にしながら、また他のお母様達との交流を交えて子育てなさると、よりよい良い子が育つのではないのでしょうか。

(西川)

母が来てくれているんですが、遠いところから来てくれたということはすごい感謝するところでもあり、今、話を聞いていて、やっぱり親子でも、さっき出た通り、世代間のギャップがすごくあるなぁと感じる時もあるし、今話を聞いていて、ちょっと親子ゲンカになっちゃうといけないんですが、一步引いて余裕を持ってというのもすごく分かるんだけど、でも実際にやっている私たちは大変なところで生きているんだって。生きてるって言うてはあれかもしれないけれど、大変な気持ちと戦いながら子育てをしているし、やっぱりそれをみんなと周り、自分で背負わせないところもあれだし、なんかこう、もう一步、歩み寄ってほしいところもある。皆で応援してもらいたいというか、確かに主人とかは仕事に行き帰って来て疲れているけど、私も1日子どもと専業主婦だからと言って、遊んでいるわけではなくて、ちゃんと、自分は自分で子どもと向き合っている中にあるので、やはり帰ってきたら、そっちも疲れているけど、私も1日何もしていない訳ではないので、疲れているし、というところもあるから、もう少し、お互いの話をしていけるもの大事だし。まともにならなくなってきたんだけど…話すところから理解じゃないけど、割り切っちゃうわないで欲しいのもあるなあって。その気持ちをすごく押し殺しちゃうとこちらもすごく大変な気持ちになっちゃうので、大変な時は大変だと言って言えた方がすごく気も楽だと思うので、やっている方としても。なんかそういうところを一緒に見て行ってもらいたくなって思います。思っていることがうまく言葉に出来なくて、申し訳ないんだけど、そういう風に私は思ったので、ちょっと一言。

(飯島)

妊娠・出産のところを紹介したときに、これってみんなどう思うかなって、ちょっと話したいことがひとつあったので。「自分だけが頑張ったのではなく 子どもと一緒に頑張ったのだから」というのが皆が肯定しやすい質問だったんです。結果で。これは皆の話し合いの中で出てきたことなんですけど、本気でそう思っている訳じゃなくて、妊娠時、マタニティー向けの教科書だったり、あとは実際、分娩が始まって、分娩中に助産師さんから「赤ちゃんも頑張ってるんだから、お母さんも頑張るって」みたいなことを言われる。自分が本気でそう思うよりも周りからそう刷り込まれていることもあるんじゃないかな。ということも話し合いの中では出ました。

(アンケート実行委員 Yさん)

本当に思っているのかなぁというのもあったんですけど、あとは、その生まれた時というのは、その子どもと一緒に頑張ったという感動というかそういうものがあつた。だけでも日を重ねるごとにいうのか、子育てをしているうちにその気持ちってどうなっていくってということもちょっと…こういう気持ちを持っていたあの頃からずっと子育てをしていって、その気持ちをずっと本当にそのまま持ち続けていられる私達だろうかとかそんなことも話題に、このひとつの質問、回答で話題になったりしたよなあって思ってたんですけど。

(アンケート実行委員 OMさん)

私はちょうど昨日で7ヶ月になった娘がいるんですけども、頑張っただけで生まれたって、そう言われればそうなんだって思うんですけど、私の場合、ちょっと逆子で帝王切開で産んだので、子どもが生まれた瞬間って、私は当然意識がないので、何も分からず翌日の朝になって「お子さん連れてきますね」って言われて「はい」って。あっ、この子が生まれたんだって感じでしか、生まれた瞬間を私は見ていないので、私は切った後のお腹の痛みと、あっ子どもがここにいるっていう思いしかなかったということが正直な思いで。きっと頑張っただけで生まれたって皆が言ってるし、そうなんだろうなってしか思っていない部分もあったりして、確かに頑張ってくれたんだと思うんです。じゃなかったら、生まれてきてくれてないと思うんです。だけど、実際、正直に言っちゃうと、麻酔かけられて、あの一気が付いたら生まれてたという方が強いので。

(石原)

私も帝王切開だったんですけど、自分だけが頑張ったのではなく子どもも頑張っただけで生まれたのだったっていうのは最近になって、子どももお腹の中にいる時から、ちゃんと生きていくことをしていたという、生まれてきて帝王切開だろうが、自然分娩だろうが、今までお母さんの胎盤を通して、酸素とかをもらっていたんだけど、自分が自分の肺で呼吸をしてここで生きるんだっていうのを、そこでやらないとだめなんだよなってことが一番初めにあるんだよなってことを最近知って、知ってっていうかちゃんと認識をして、お腹の中にいるときから、この子はちゃんと生きてたんだ。自分の力もちゃんと使っていて、何もできないんじゃないかって、一番初めからそういうふうに来るってことをしていたんだって。それなのに、どう頑張っていたんだらうってそれ以上、自分も知ろうとしないで来ちゃったよなって。生まれた子はただ世話されるだけの存在。自分からこう発信する存在とって思っていたら。今は本当に子どもと一緒に頑張っただけで生まれたんだよなって思う。今まで赤ちゃんは、ちゃんと意思を持っていると認識していなかったんで、私はその時つけていたら、「あーそういうもんよねー」みたいな感じで、子どもの意思というのはあまり関係なく、をつけちゃっていたんだらうなって思ったところだったりしたので、子どもはお腹の中にいる時からちゃんと人間として生きていくことを知っていたら、もっと妊娠中の生活も違ったかも。もっと楽しめたかもと思いました。

(鈴木)

私はもう子どもが大きいんですけど、今回皆とこのアンケートを一緒につくって自分達が2002年にやった時と、同じような気持ちが皆からいっぱい、いっぱい出てくるっていうのを本当に変わらないのは変わらないんだなあって思ったのと、あと「今どきの子育て」っていうところのそのグループが見つかったように、今の時代だからこそ、皆そういう新しい大変というものの中で一生懸命やっているんだなあって思いました。また、これから先どうやって、私の子どももこれから大きくなって親になっていく、皆の子どももまた次の時代に大きくなっていく時代に、どんな子育てを女の人はやってくんだらうなって、息子たちもどんなお父さんになっていくのかなっていうのを本当に皆で考えられたらいいなって思っています。何か皆がこうやって大変にもなるって作業自体もやると、自分の気持ちや周りとの関係がどうあるかって向き合うことになって、大変になるっていうのもあるけど、どうやって支えていけるのかなっていうのを私は一生懸命皆で考えたいなって思っていました。アンケートの中では「男性は妻の出産よりも仕事の方が優先だ」って項目が男性も女性も同じだったことが自分のことと重なって今日は思っていました。自分の出産の時、男の子3人産んだんですけども、全部夫は立ち会ってなくて、仕事に行っていていいよって、まだ生まれなさそうだからって、仕事に行かせちゃったんです、自分が。私は自分が出産する時、その時のことが大事だった自分自身思っていなかった。仕事の方が大事だったって思っちゃった。そういう私だったなって今思って、取り返せないことだけど、生まれてくるとか、生きていくとか、死んじゃうとか、そういうことより大切なことって無いはずなのに、仕事に行かせたなって思って、それを女性と男性が同じような割合で肯定しているっていうことが、何ていうことだらうって。それを私達、女の方がもうちょっと考えなかったらいけないよなって思っていて聞いたりしているなかなでした。Yさんが手がこうあがっちゃう、飯島さんが叩いちゃうことがあるって言うんだけど、そこが「後で抱きしめれば愛情は伝わる」ってことが女性の中で高いっていうのもそこもまたあるなって思ったり、それはどこから来てるのかなって、やっぱり皆でそこを話していけたら見つけていきたいよって今日はなんかとても嬉しい話し合いにもなっているなと思っていて、Oさんが前のアンケートの

時に、本音でここでは話せるんだよなあって自分の気持ちを言っていってことからはじめたいよって言ってくれたことが、本当にそういう関係がなかったら、自分の気持ちがどういうところにあるのかっていうのが見つからないで来たのが話し合える相手がいるっていうのがこのアンケートをやる中で、こんなに皆と話し合えるなかで、これはどう思っているか見つけて行けるって場が出来たんじゃないかなってすごく嬉しいことだなんて思って聞いてました。

悪循環になっちゃうって、本当は「みんなで子育て」ってしたいけど、悪循環になっちゃうってどこからきてるのか、そういうことは皆でよく見つけていくってのが、今日は今日で一旦報告なんだけど、これからまた話していくってのをしていきたいと思います。どうもありがとうございます。

(渡邊)

率直な感想をいうと、大変なことをやったなあっていうことになりますね。十年位前に「真夜中の彼女たち」という話題になった本があるんですよ。それはね、決して歌舞伎町の風俗のこととかそういうんじゃないんで、どういう本かっていうと、皆さん昔学校で習っていると思うけど、樋口一葉とか、与謝野晶子とか、明治の女の人たちが、自分の気持ちや発言ってものを、言葉にしている。書いて表現していこうと思った時に、彼女たちは、女としてもその時代は、女性は自分の声を社会的にあげていいとは思われていなかった時代なので、普段から女としての仕事を全部終わらせて、そして本当に真夜中にしかすることができなかつたんですね。そうやって立ってきた女性たちの苦しい、自立の時代ってのがあって。で、それにまた匹敵するくらい、大変な思いをしながら、自分たちの声をですね、あげていくのに、さっき「無謀な」とも言っていたけどね。そのくらい周りが求めてもいないかもしれないし、理解されていないかもしれない。ね、でもトライしたんだから、そういうことが大変印象に、強く残りますね。その上で、ですけども、さっきYさんが、手をあげそうになっている自分がいつもいるんだ。と、それに、それを見てですね、ビックリしたというパートナーがいるわけですけども、Oさんが、「ビックリしたですむのかよ」とって、こういうふうに言ったわけだけど、私もそこがまったく同感で、ビックリしないで、そうしたくないに決まってるわけだから、どうしてそうなるのかっていうのを、一緒に考えてくれる本当の意味のパートナーになってくれないかなあってね。その為のね、出発点とかねえ、そういうものが、今日、ハッキリ自覚的に、皆さんの中で確認できたっていうね、すごく画期的なワークをなさったなあってね、思います。…で、さっき、妊娠出産のところで言ってることは、昔が、どんなふうにいるかってことと、子どもをですね、ある大臣が言った「女性は子どもを産む機械だ」とこういうふうにして、ヒンシュクをかいましたけれども、社会的にはそういう風潮がとっても強いんじゃないでしょうかっていう、…私がそう思っているとそう思わないでください。そういう中にいると、どんなことが起こるかっていうと、産む女性ひとりひとりが、YさんがYさん、鈴木さんなら鈴木さん、飯島さんなら飯島さん、そのひとが産むってことが大事にされるわけじゃなくて、女だから産んだってひとくくりりですまされている。ということがひとつあることだということと、それから、子どももお腹の中にいる時からひとりの人間。個性的だし、その子、その子の可能性を持って、一生懸命生きているわけ。生まれて出てくるときに、それこそ紫色になって、長い酸欠状態をくぐって生まれてきたり、がんばって生まれてきて顔が浮腫んでいたりいろいろして、可愛くないわあって思ったりする場合もあるわけだけど、それだけ子どもの方も、頑張ってやっぱり生まれてきている。ということがあられるわけ、その話でいえば、女性ひとりひとりの、出産って女性ひとりひとりが大事にされていないってことと、生まれてくるひとりひとりが大事にされていない。ってことと、その両方の関係を大事にしていない。そういう私たちの社会が、そこに丸出しになっている話しだなんていうふうにして、とても実は、大問題だなんて、いうふうに思います。それから、さっき、私と、同世代っていう、失礼。私の方がかなり、歴史上の人物に非常に近いんですけど、私よりお若くていらっしゃるんですかね、団塊の世代っていうんですけども、この世代の方とギャップがあるなあって、親子喧嘩にならないことを私も願いますが、多分ならないと思いますけども、これはそれぞれの生きている時代が違うんでね、その、どこが大変でっていうお互いにバックグラウンドをよくわかり合うってことが、それがすごく大事な作業になるだろうと思う。そういう意味で言うと、このアンケートは、大変な価値をはらんでるっていう、お母さんが来て下さって、たとえば言いますね、僕はねえ、このアンケートの中で一番注目する因子はねえ、実は第2因子なんだけど、これはね、なかなかいいラベルをつけたなあって思ってますが、「育児の悪循環」そういってるんだけど、中に入っている項目を見てもらうとわかるんだけど、「あれダメ、これダメって叱っていることに疲れる」とか、「子どもがいうことを聞かないと自分に反抗しているようでイラつく」というね、「子どもがなくのは自分に原因があるような気がする」とかね、

そういう質問項目ってなんですね。これはひとことで言うと、子どもが、自分の思うようにならないときに、思うようにしないといけないんじゃないかっていう思い込みもあるかもしれないし、他の因子でもさっき説明してらっしゃったけど、父親側の第 7 因子、パートナーとの関係が大きく関係しているなあっていうこともあるし、それから第 5 因子ですね、一人で子育てをして背負い込んでしまうっていうそういうこと、それから、第 4 因子の今時のしぼりの中で孤立している因子、そういったものが、深く関係しているんですね、それが第 2 因子に実は表れている。言ったら、子育てしているときに抱え込んでしまうジレンマのことを言っていると思いますよね。これの後ろ側にあることはなんだっていう、そのところが実は出発点であるように思います。で、どうして、手をあげかけちゃうのか、実際たたいちゃうのかって、あるいは布団をかぶって絶叫しちゃうんだらうって、これはね、年代の高い方はそのときどういうふうになさったかっていうのをあまり語ってらっしゃらないわけですけども、布団を 3 つくらい重ねてその上へほうり出したとかいろいろ実際聞いてみるとやっぱりあるにはあるわけですよ、ただそのどういうところが違ってくかということ、団塊の世代の方の時代っていうのは、家族が単位で成り立っていたんですけども、今は一見気付けないんですけども、家族単位で暮らしているように見えますけど、個人が単位であるようにどんどん変わって行って、たとえば学校のひとクラスの中に、4 分の 1 くらいは一人親でね、暮らしている訳ですけども、そういう時代ですし、いろんな生き方がある時代なんですね。だから昔のように、だから団塊の世代は原則的に一般的にっていうと、男は働きに行って、女は家事育児して、それで後の担い手を育てていくっていうそういうのが一般的な時代だったわけですけども、実はみなさん、子育てして今いらっしゃる方の、えっ、お歳は聞かないでおきますけども、大体 1970 年前後から 80 年前後ぐらいにお生まれになった方がほとんどだらうと思います。で、実は団塊の世代の方は、そのちょっと前に大人になって、世の中に出てきてこられて、それは高度成長期って言っている時代の話だったんですね。その時代の陣形が男が働いて女は家事という形だったので、どこのうちも皆そうやっていた。どこのうちも皆そうやっていたってことは、それぞれ孤立しているように見えて、実はどっかで安心しているところがあって、で、その結果が、経済的な繁栄がある時までにはもたらして、1 億総中流時代ってこう言っているわけですね。その 1 億総中流時代が実は気付かない形で、崩れた時代から生まれてきた世代なんだ。で、だから全くちがう時代に生まれて来るのね。生んだ親の方は逆に気付いてなくて、私の背中を見て大きくなりなさいという、背中を見ても大きくなれない、生きていられない時代に入っていった。そういう時代なんですね。どうして、私たちの中に、そういう体罰をどっかで容認して行ってしまうような、あるいは、後で抱きしめれば愛情は伝わると、こういう風に言ってますけども、叩くことで一つ暴力だと言えますね。子どもの側からしたらそうなんですね。その上、子どもは親なしに生きていられない環境に置かれてますから、そこへ付け込んで抱きしめたら、お母さんは絶対愛してくれている。って思いたいところに付け込んでいるわけなので、二つ目の暴力をそこでしているようになりませぬ。と、子どもは逃れようがない。そういうつらい関係を、実はしたくないのに、しかかってしまうんだ。それを切々と訴えている。これはね、ものすごい勇気が、お母さん達の世代からしたらすごく勇気がある発言なんですよ。なぜかと言ったら、あれは、お母さんとしては失格じゃないとか、ダメな女性なんじゃないかっていう、堪え性がないんじゃないとか、今の若い人は本当は耐えられないんじゃないかっていう、そういうような偏見につながりやすい考え方と思うんですよ。で、いつもやって見せることがあるんですけども、たとえばですね、団塊世代の時に一番多かったことは、そのお子さんたちが、生まれて少し大きくなる時に起きたことですけども、1973 年を境にして、私たちの社会は 180 度ひっくり返るんですね。それはどういうことかという、それまでも学校に行かない子どもたちっていうのはずいぶんいたんですけど、一番数が少ないのは 1973 年、で、そこから学校に行かない子どもたちってまた増えている。今度は理由が違ってましてね、皆と同じであるはずなのに、自分がどっかで違ってる。それから、他の子よりちょっと出来のいい子がいじめられる。それから人と比べてちょっとなにかボロイとかキモイとか言われたり、そういう形で、「ひとはみんな違ってみんないい」とか口では言うけども、本当はそうじゃなくて、それをこの閉塞した社会の中で、いじめることで“うさ”をはらしながら生きていくいじめ世代に突入している中で、大きくなっていた子どもさん達なんですね、そして、私達の世代は、子どもが例えばある時学校に行きたくないと言った時にお母さんは、あんたの為だから学校に行きなさい。と言いますよね。お父さんはお母さんに、子ども一人も満足に育てられないのか。ってこういうふうに言うと思うし、自分も頑張ってるんだからお前も学校に行けって言うと思うしね。そうすると、矢印は、非難は全部子どもに向かって、子どもその人が、本当はその時どんな気持ちでいるとか、どんな思いでそれを伝えているんだとか、それをほとんど声に出さなかった時代のお子さんたちなんです。それがやっとなんかこういって勇気を出して声に出してきた。自分はつらいんだ。つらいんだって言うてるんだから、それに耳を傾けて、最初

に辛いんだって言ってくれた人に対してね、孤立させない。しない。そういうネットワークを作ったことしたときにね、さっき O さん（一般参加者）が言ってくれたように、ここへ来たら自分の本音を言っていいた気がした。そういう風に言ってくれたのだと、そう思いますよ。で、その実は第 2 因子の、自分の思い通りに子どもを育てなくてはいけないんじゃないかっていう暗に後ろにある、縛りつてのは実は、私たちの世代から受け渡してしまっていたものなんだ。それに加えて、消費社会ってのは、今度のアンケートで彼女たちがハッキリ突き止めたわけですけども。えー、僕はビックリしたんですけどもね、話し合いの時に関わっているときに、妊娠線を消すクリームが売りに出てるってことを聞いて僕は本当にビックリしたんですけど。たとえばですよ、そういう風にいちいち今も周りの目を気にしながら、あるいは自分の自分イメージってものをできるだけ壊さないで一生懸命生きようと思っているんですから、子どもを宿すと当然お腹が大きくなっていくに決まってるわけですけども、そのことを気にしながら産まなきゃなんない、ということも含めて、いちいち商品の対象になって、育児本もみんなそうだと思いますけども、そういう中でお母さんたちが一番こうつらく思っているところを消費で埋めてごまかしていってしまう。そういう中で本当は、自分のつらいことを人には言えなくて、いじめの時代のそれとない付き合いをしながら、本音では言わないけども、はずれないようにして生きるっていう、男の人にはなかなか出来ない辛いスキルを持ってね、女性の方は生きていくんだよなあっていう、そういう中で今はカモフラージュされた、孤立させられた子育てなんだっていうふうに、この彼女たちが突き止めたことは、すごく大きな意味があるし、彼女たち以上に私たちが一緒に考えていかなければいけない。男たちが一緒に考えていかなければいけない。すごく大きな課題っていうかな、現実を突きつけてくれたもんだなあっていうように思いました。ひとつひとつの発言がすごく勇気がいったと思うので、このことが無駄にならないように思います。ありがとう。

(一般参加 Nさん男性)

えーっと、すみません、あの、取材で来てるのですが…非常に皆さんで考えていらっしゃることがあるんだな。というのがわかって、表面的な話は出てきても、根底の部分の話ってのはなかなか出てこないのだからっていう風に思っていたのですが、今回結果をみまして、皆さん考えていらっしゃることがいっぱいあるんだなあって、いうふうに感じました。まあ、僕は仕事柄そういうのを伝えていかなきゃいけない仕事ですんで、この声を伝えて行ければな、って思います。

(アンケート実行委員 Hさん)

私は今 1 歳 3 か月の男の子と、主人なんですけど、Y さんの話を聞いて、手をあげてしまうって聞いて、私が手があがってしまう方なんだけど、まだ自分の中で考えがまとまってなくて、明日になったら考えが変わってしまうかもしれないんだけど、今までこのアンケートで周りに原因があるんじゃないかって、子どもじゃなくて、自分の置かれている環境でそうイライラしちゃうんじゃないかって思ってたんだけど、今日話しをして、いや違う。自分なんだな。って、思ったんですね。なんか、手をあげてしまう、自分が否定的になってしまっていることに気づいたんですよ。今。周りがどうこう言おうが、あたしは手をあげてたいてしまうけど、この子を本当に愛しているんだよって。でも、毎日頑張っているじゃないって言える自分だったら、もしかしたらそんな風に思わないのかもしれないなって。なんか…うーん、なんだろ…確かに、たとえば、忙しいとか、寝不足だとかそういうのも原因があるかもしれないけど、周りになんと否定されようと、私は毎日頑張っているんだ。私は毎日子育て頑張っているんだ。1 日 1 日ほんとに頑張っているんだっていえる自分になれば、そんな周りに、たとえばご主人にビックリしたよって言われても、手をあげちゃうこともあるよ。だけど私は毎日頑張っているんだよ。って言えば、こんなに苦しくはならないのかもしれない。だけど、今気付いたところで、その、やっぱりたいていしまう自分を、認められないというか、その叩いてしまうことを認めるんじゃないかって、叩いてしまった自分を許してあげられるというか、誤解はしないでほしいんですけど、叩くことじゃなくて、叩いてしまった自分を、許せるようになればいいな。と、今日思いました。ちょっと、なんかまだ考えがまとまってないんですけど。みんな頑張ってるよね。って思った。Y さんの話を聞いてて、今日はそういう風に感じました。自信を持っていいと思います。みんな頑張っているよね。毎日。当り前のことでいいと思うんですよ。朝、子ども起こして、旦那起こして、旦那のご飯を作ってあげた、お風呂掃除やった、洗い物やった、それってすごく当り前のことかもしれないけど、頑張ったよねって。そんな自分でも頑張ったよねって。今日一日頑張ったじゃんって、言える自分たちになれば、もっと気持ち楽になれるんじゃないかなあと思いました。叩いちゃう私がいいたよ。だけど、毎日頑張ってるよって、

思いたいな。と思いました。でも、もちろん、叩かなくて済むのなら。その辺はまだこれからの課題かな。と、思いました。すいません最後にひいちゃって。で、そんな私を見ている主人に回します。

(一般参加 Hさん夫)

みなさん睡眠不足になるような感じになるようなアンケートとかメールのやりとりとかされているのを見ていて、すごいな、今回のアンケートに対して、どういうような形で、どういう結果になるのかなと、個人的に興味があって、ちょっと、あの、来たんですけども、子どもがいるいる、外に出たがってたんで、あまり話半分には聞けなかったんですけども、今回ですね、皆さんの意見の中で、一番大きいところは、手をあげるってところ、もうひとつが、抱きしめるってことに対して、それは暴力に入ってしまうよってところにお話もいろいろあるんですけども、私はそれは暴力っていう表現というよりも、どちらかという、愛情表現のひとつなのかな。という風に思っています。まあ、手をあげるということが、決していいっていう、あの、社会の風潮からしてもそうなんですけども、決していいというわけではないのかもしれないんですけども、それって、一昔前ってのは、手をあげるってのがひとつの愛情っていう表現で、なっていたのかなっていう、子どもの教育に対して、我々小さい頃というのは、学校の先生にも叩かれ、家に帰っても叩かれていたところで、そういう風に生きていた中で、我々がじゃあ、実際に子どもを授かって、それに対して手をあげるってところについて、はたしてそれが、暴力なのか、愛情なのかっていうところは今回のアンケートをみてもまあ、私もちょっとそこがわからないなってところだった。で、もう一つのところの抱きしめるってところのちょっと暴力っていうお話しもあったんですけども、まあ実際に子どもが泣いたら抱きしめる、眠くなったら抱きしめる。お腹がすいてても、なんかとりあえず泣きやませなきゃいけないってところの抱きしめる、っていうところも、それが果してどうなのかなって、またちょっと、子どもの気持ちに立ち戻ったところですね、もう一回ちょっと考えていきたいなっていう風に思っています。

(渡邊)

ちょっと、いいかな?・・・別に切り離さないで、叩いた後に抱きしめるっていうのが暴力であるって、そういう関係であって、抱きしめること自体が暴力ではないですね。それから、私たちも、先生に叩かれたりよくして、大きくなってきて、あれは愛情なんだってこう思って頑張って生きてきたってあると思いますけども、それは、その時私自身の気持ちを相手がどう汲んでくれているのか全然わかってませんね。だから、子どもが本当はどんな風に思っているのかなっていうことが、いつも置き去りにされて、叩く側の何が暴力性を持っているのかというと、これだけはハッキリしていて、ものさしは、叩く側が握っていて、そして、どの程度叩くかっていうのも握っている側が握っていて、そして、叩いた責任はお前が悪いんだよっていう、その構図が問題なんだ。ってそういうことを言っているわけですね。それを、一心に子育てしている母親に負担がかかる中で行われていたら、これは、叩かずにおれないんだっていう状態に当然なっていくわけになるし、その時に、自分のことをどっかで半分否定しながら抱きしめているHさんもいるんだって、さっきそういうお話しになって、それをこんな状態の中で頑張っているんだよみんな。頑張っているんだよって、そう思おうよってそういうように発言なさったんだ。って思いますね。でも、頑張っているには違いないけど、最後におっしゃったように、叩かないでいいんだったら、つまり、子どもと自分とが、もっといい関係で、いられるのであれば、あるいは、自分の子育てが周りの人から見て、もっとよく理解されていく中で、できるのであれば、そういうことにはならないのではないか。そういうことだというふうに、私は思いますね。それから、私たちの社会にある、暴力性の構造そのものが、そういう形をもっていて、実際にいつも言うんだけど、ある統計では、3日に一人、子育てしている人に、子どもの意志と関係なく、殺されたり、死んだりしなきゃならない状況が現にある。心中って形を取ることもある。3日に一人、これが事件になることなんですけども、身近な関係の男性から女性が、殺されたり、死ななきゃならなくなったりもするそういう数字がハッキリと社会の中にある。そういう暴力性の後ろ側にある、子育てを通して、その相関関係かな、そのご自分たちの声を通して確認されたたてのが、大変大きな社会的な意味を持ってね、いるだろうと思いますよ。今発言してくれたHさんのパパに、反論しているとかそういうのではなくて、ここから色々、論議を起こしていけたらなって思いますよ。

(アンケート実行委員 SHさん)

私は、5歳の男の子と1歳7か月の女の子と子どもがいるんですけども、毎日やっぱりいそがしくて、子どものことを構っていらなくて、自分の思う通りに、ことが進まないとやっぱりイライラしてしまったりすることが結構あって、その分それを子どもにあたってしまうこともあり、それが、あたってしまってから、自分が後から後悔するってことがすごいあって、それも自分が苦しくて、そういうことがあったって言って、主人とかにどうすればいいかなって思って、話して、そうアドバイスをくれるんだけど、なんかこう、やっぱり関わってくれる、しっかり関わって欲しいんだけど、っていう、中途半端で関わってくれているみたいで、なんかやっぱり子育ては私一人でやっているのかなっていう風によく思うんですね。で、やっぱり、こうお母さんたちが、こうやって苦しんでいることを、周りの人たちなんか、パートナーなんか真剣に、やっぱり自分も仕事があったりとか、他の大事なことがあるかもしれないんだけど、でも、それでも、やっぱり、子育ては皆でしていくものなんじゃないのかなあって、私は思っているんで、苦しい気持ちもわかりつつ、皆でこう、うまくやっていけたら、お母さんたちの苦しみとか、悲しみとかそういうのも、少しはやわらぐのじゃないかなってそう思います。あまりうまく言えませんが、自分も変わりつつ、自分が助けてほしいって気持ちが外に出せるようにこれから頑張っていければいいなと思いました。

(アンケート実行委員 Tさん)

うちの娘は2歳・・・もう少しで3か月なんですけども、自我がものすごく強くなってきて、うちの中でも、叩くってということと、虐待、体罰ってのを関係がどうあればいいのかって、最近自分の中でも、悩むところで、今日のYさんの話はすごく勇気がある話だったなあって思うんですけども、子育て・生き方ってところについて、「叩いても後で抱きしめれば子どもに愛情は伝わる」という風に肯定が男女とも強く出ているようなんですけども、ただ、愛情は伝わるよって、叩いても後で抱きしめればいいんだよって、今の私に言われても、ちょっと納得できないなってところがあり、やっぱり、子育てってみんなでするものだと思ったし、思っているんで、やっぱり、パートナーであったり、こういう気持ちをさらけ出す場がないと、母親の気持ちってなかなか消化しきれないんじゃないかなって、私はすごく感じていて、こういう場も、私は参加できて、すごくありがたいなって、思っています。

(アンケート実行委員 NAさん)

今日のお話し、皆さんがされていた中で、Yさんの、手をあげそうになるというお話しをされて、その後、西川さんのお母様が、裸のときは、そういう裸の時はちょっと裸を楽しませてあげればいいんじゃない？っていう気持ちになれば楽になるっていうか、そういう風に自分の気持ちを・・・そのお母様がされていた話しを聞いて、私は、私もそういう場面ですごい自分を追い詰めちゃっているっていうか、子どもがそんなに悪いことをしている訳じゃないのに、自分がこうして欲しいからってということで、すごい子どもにイライラしてしまったりとかするんですけど、ちょっと気持ちを変えてみるだけで、子どもがどうしたいのかなって気持ちに変えてみるだけで、その場、その時の状況が変わってくる、というのを思って、私はお母さんのように、私は西川さんのお母様の話を聞いた時に、すごく、あっ！そうだってすごくすーっとしたんです。なんで、自分で追い詰めちゃってるんだらうって、やっぱり私は、自分の場合は、手をあげそうになったり、なんかこうよく、ギューッ！とかやっちゃうんですけど、そういう時って、自分がイライラしちゃってる時だったりしたって、思ったので、やっぱりこう、気持ちを切り替えるだけで、ほんとなんて楽になるんだらうって、子どもを見てあげられるんだらうって思ったりしました。

(アンケート実行委員 Sさん)

第4因子の「今どきの子育て」ってところに、私ちょっと思い当たる所があるなって受付をしながら思っていて、結構周りにいろいろ言われて、なによ！って思うんだけど、結構周りに影響されてる自分がいる。みたいな。そういうのを感じて。もっとこう、自分に、さっきHさんが言ったみたいに、自分の育児に自信が持てる母親になっていけたらなって感じました。

(一般参加 Bさん男性)

この子育てネットワークとは平成15年度くらいに仕事で出会ったんですけども、いろいろ子育てのことを考えて、自分自身も子どもが大きいんですけども、子育て中にどっちかっていうと、仕事ばかりしていて、中々できなかつた、そういう思いがあって、今何ができるかっていうことで、こういうしゃべったりする場所みたいなものが近くにあればいいなと、居場所づくりみたいなものを自分の近くでやっとうとしているんですけども、その為にちょっと立ち寄りました。

(一般参加 OMさん夫)

OMの旦那です。色々お世話になりました。本当に、子どもを育ててまだ7か月なんですけども、わかんないことばかりで、試行錯誤しながら皆でやっぱりわかんないことが多いんで、こういう、そばに彩の子ネットワークみたいなものがあると、すごくうちの嫁も助かった。気分的にもすごい助かった。やっぱり地域にこういうのがあると、いいかなあってすごく感じました。これからもお願いします。

(鈴木)

皆が話した、手があがっちゃうっていう気持ちの続きに、やっぱり3日に1人子どもが死んじゃっているっていう、その事実が本当にあるんだなって思って、だからやっぱり、叩いたりすることをしたくないって本当に私たちは思うし、大事にしたいって、子どものことを本当に大事にしたいって思う。自分の気持ちを本当に確認してっていうか、それが自分の大事にしたいが、本当に大事だなあって思って、またみんなで、それをどうしたらいいかって、話していきたいなって思っています。アンケートの報告としたらまだ途中で、もっともっといろんなことが見つかっていくアンケートだなって思っているんで、また来年度も、話し合う場を作っていく必要があるんじゃないかって思っています。またお誘いしたいと思います。飯島さん中心にまたこのメンバーが、よくやったなあって思って、本当にありがとうっていうか、うれしかったなあって思っています。今日来て下さった方たちも本当にありがとうございました。